

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年6月1日発行

(毎月1回1日発行)

第16巻第6号 通巻180号

6 月号

2021



烏の豌豆近江一國晴れあがる

農園の日向まるごと苗障子

土筆摘みしは逃水のあの辺り

母郷てふほどのものなし蝻の道

若狭への峠の茶屋の吹流し

木の芽田楽鋭く餅還りくる

芭蕉曾良まぼろしにして花の山

葬一つ在り陽炎の立つ里に

和を以つて貴し蝸蚪の浮き沈み

亀鳴ける日なり大空放哉忌

茎立ちてなほ一切を捨てきれぬ

カステラのざらめの乾く卯月寒

爪切つて暮るるに遅き日なりけり

日向まるごと

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

いとさんの写真を添へて雛の段
 黒猫と眼の合ふバレンタインの日
 天平の風の来てをり梅真白
 チューリップ涙に最も遠き赤
 春霞山羊のチーズと白ワイン
 鶯や富士を遥かに蘆花旧居
 雛に声掛けて雛を納めけり
 梅見頃なり焙じ茶を二人分
 鷹鳩と化して谷中の花の寺
 風の花崩れて雨の花となる

林 未生
 井上つぐみ
 田 邑 利 宏
 吉 清 和 代
 北 城 美 佐
 河 合 公 八 郎
 水 谷 は や 子
 佐 藤 あ さ 子
 相 川 健
 生 井 ち よ み

増成栗人 選

ひと息を入れるベンチに鳥の恋
 遊びごころ欲しふはふはと春の雪
 灯りゆらゆら禅寺の春障子
 約束は駅の北口春シヨール
 木の芽晴フランスパンの紙袋
 神田川いくたび花を流ししか
 驢馬の目に春の愁ひのありにけり
 冬眠の熊の目覚める頃の雨
 初桜即興詩人に会へさうな
 天を衝く白木蓮の潔さ

藤 原 明 美
 和 田 遊
 北 村 操
 青 木 ま ゆ み
 美 濃 律 子
 足 立 枝 里
 山 口 優 子
 駒 井 ち え 子
 原 達 郎
 村 上 栄 子

「燕」はスズメ目ツバメ科の総称。夏鳥として春に南方から渡来する。

早口でチュビー、ツピと鳴き「虫食って土食ってしぶーい」と聞きなされる。燕が巣を作るとその家は繁栄するとも言われて来た。都会でも泥でつくった燕の巣が軒先等に見られる。

姫雨燕は、昭和四十二年に日本で初めて繁殖が確認された新しい留鳥で、鉄道や道路のコンクリートの壁に営巣する。

つばくろ・つばくらめは和名、乙鳥・玄鳥は漢名である。

子燕のすかさず舟屋だまりかな

鴻司

燕

特集

俳句に詠まれた燕

佐久間敏高

燕は春、日本に渡来し、全国各地の軒先などに泥と唾液で巣を作り、町や田園を飛び交う野鳥である。燕が飛び交い始めると、いよいよ春もたけなわの感じとなる。

初燕父子に友の来てゐる日

加藤楸邨

渡り来て秩父も奥のつばくらめ

石塚友二

つばめつばめ泥が好きなる燕かな

細見綾子

貝鉤はらりと解けて燕来る

吉田鴻司

田燕となり遠山へ翻る

増成栗人

燕が切る空の十字はみづみづし

福永耕二

燕は四月下旬ごろから三か月ほどをかけて、二回の産卵を行い、そのため餌を運ぶ親鳥のせわしい飛翔など燕が最も燕らしく感じられるのは、むしろ夏の時期である。

むらさきのかゑを山辺に夏燕

飯田蛇笏

夏つばめ喪服つぎつぎ山路より

飯田龍太

小気味よく艇庫を抜けし夏つばめ

能村研三

安房は手を広げたる国夏つばめ

鎌倉佐弓

鳴き出して鉦泉赫し夏燕

毛塚静枝

燕の産卵は五月初め頃と、六月半ばから七月までの二回である。それぞれ一番子、二番子といい、五羽ぐらいずつ半月ほどで孵化する。雛は親鳥から餌をもらって成長し、やがて飛行の練習に励む。孵化から

二十日もたつ頃には巣立ちを始める。燕は人と親しく、人家の軒や天井に巣をかけるので、大きな嘴を開けて餌をもらう姿など、雛の成長の一部始終を観察することが可能である。やがて大きくなった幼鳥たちは、親とともに人家を離れ、秋には南方へ渡って行く。

飛び習ふ青田の上や燕の子

麦水

陀羅尼助軒端の燕孵りけり

水原秋櫻子

早瀬の風に口あけ燕の子

飴山実

飛び過ぎていのち落とすな燕の子

福田甲子雄

子燕のこぼれむばかりこぼれざる

小澤實

雛を育て終えた燕は夏の間葦原などで過ごし、九月頃には群れを成して帰って行く。人家の軒先などに営巣する親しみ深い鳥なので、姿を見かけなくなると寂しく感じられる。

身をほそめとぶ帰燕あり月の空

川端茅舎

秋燕にしなの祭湖荒れて

橋本多佳子

秋燕に映えつつ朝日まだ見えず

中村草田男

簗に一水まぎる秋燕

角川源義

ある朝の帰燕高きを淋しめり

鈴木真砂女

「秋燕忌」は我々の師系である角川源義の忌日（昭和五十年十月二十七日）である。

ぬか床のまだ生きてをり秋燕忌

角川照子

父の座に母隣りある秋燕忌

角川春樹

秋燕忌過ぎてヒマラヤ杉隆し

吉田鴻司

新宿に星の流るる秋燕忌

佐川広治

簗に日のさらさらと秋燕忌

小島健

つばめつばくら三尺の螢小路

増成栗人
伊藤真代

四年ほど前、三重県鳥羽市の離島、答志島で行われた鍛錬会での主宰の句です。

島には三尺ほどの狭い道が何本もあり、屋根が触れ合うように家々が向かい合って立ち並んでいます。日も遮られ少し薄暗く、梅雨時の蒸し暑さも忘れさせてくれます。昼間のせいか、生活の音もほとんど聞こえてこない、静かな小路です。

リズム良く歯切れのいい句。燕の動と螢小路の静の取り合わせ。島の生活が、ふっと句ってくるような気がします。

一度目にしただけで、ずっと私の心に残る好きな句のひとつです。

「燕」
——特集

燕の一句

「燕」を詠んだ自分の俳句、または「燕」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「燕」について語っていただきました。

沈みたる艦船の数海燕

三橋敏雄
足立枝里

俳句の中で「戦争俳句」と呼ばれるものがある。揚句もその一句である。沈んでしまった艦船の数は敗戦した日本軍の船の数、そして乗っていた船の何倍もの兵士の数。その魂のように海燕が海の上をたくさん飛んでいる。燕という若々しい元気なイメージの動物だが、前途洋々であった兵士たちを「海燕」として詠んでいるのだろう。淡々としている表現から、戦争の悲惨さと無常が伝わってくる。

三橋敏雄は新興俳句に興味を持ち作句を始めたが、その後無季俳句も作るようになった。戦争俳句も多く作っていて、インタビューで次のように語っている。

「昭和のまちがった戦争の記憶が世間的に近ごろめつきり風化してしまった観がありますが、少なくとも体験者としては生きているうちに、戦争体験の真実の一端なりとせめて俳句に言い残しておきたい。単に戦争反対という言い方じゃなく、ずしりと来るような戦争俳句をね。」

ねぢ花をゆかしと思へ峽燕

角川源義
守屋圭一郎

鴻司・栗人、両先生の師である、源義先生の秩父長瀬での作。紀伊熊野の瀬八丁と比される長瀬、両岸につらなる巨大な岩畳

その間を燕がわがもの顔で飛び交っている。眼前にある無数の桃紅色の小花をつつっている文字摺草、この愛らしい花にも心をとめて欲しいと、峽の燕に呼びかけているのだった。源義師の動物・植物にはやさしさがあふれている。源義先生の、脚註名句シリーズより、抜粋。

私の故郷の秩父。新聞にでも雑誌にでも、その名が出ると胸おどる思いとなる。昭和三十年作、六十年も前の作品だが、私には何度も行った長瀬の思い出。まるで昨日のように感じる、すばらしい句と思う。私の実家にも舞年燕が来ていたが、春から幸福を運んで来ると、父母が大切にしていた事を思い出す。源義師は燕が好きだったのだろう。源義脚註名句シリーズに四句も燕の名句があった。

乙鳥や赤い暖簾の松坂屋

夏目漱石
並河裕子

北海道の道北地方に生まれた私には、「燕」はあまり身近かな鳥ではありません。

物の本によると、夏は涼しく短いという気象条件、雪対応の

家屋が果作りに適さないということから、北海道特に道北方面にはあまり飛来しないようです。
そんなわけで、今まで燕を題材に詠んだことはない私ですが、揚句は街中にはためく赤（実際は赤茶色）の松坂屋の暖簾と、その近くを旋回する燕の対比がなんとも春らしく、のどかなその時代を表現していると思えます。
わが街の三越の紺暖簾の上にも春を告げる燕が鳴きながら旋回する風景をぜひ見たいものです。

つばめつばめ泥が好きな燕かな

細見綾子
小林和子

健康のため、日帰り入浴に行き、体の芯まで暖める。その施設は、大きな庇をもっている。四月近く、たくさん燕の巣ができる。燕の子育てがはじまっているらしく、餌を求める声にぎやかである。

しかし巣が落ちていることがある。子燕が育ったからかなと思う。近くにより巣を見ると、泥の粒が集まっている。泥を固めて巣にするまで、どれ程の量を小さい口で運んだことだろう。この姿を見ての俳句かと、納得させられた。作者は飛んでいる燕をよく見ていたと、感心しきりである。

荒川心星

芽吹き之音

林中の芽吹き之音の聴こえさう
在りし日の母のまぼろし陽炎へり
戻り来てすぐ囀りに包まるる
万葉古道ゆく下萌の道をゆく
囀りが蘇我入鹿の首塚に
水草生ふ辺りに音の生まれけり
やはらかな風が育てし山椒の芽
美濃和紙に筆下ろすとき梅匂ふ

堰を越す羽毛いちまい木の芽どき

魚跳ねて遅日の水輪広げけり

舟入の明るさへ開け春障子

参道へつづく丹の橋鳥ぐもり

寺町や先先灯す花ミモザ

首もたげ亀鳴く前の構へとも

対岸の果てに霞める摩天楼

かげろふや文字ぽつぽつと傘雨句碑

春障子

半谷洋子

雲峰仰天

徳量寛大

徳良寛大（とくりょうかんだい）
徳が高く度量も大きく、他人に対して寛容であること

（〒497-0031 愛知県海部郡蟹江町大字須成字藤丸2008-27 / 伊藤 隆 TEL090-8959-6572）



谷口摩耶



春落葉

木苺の花の鈴生り靴を干す
新緑の揺るる鏡よ齒を磨く
山吹や即かず離れずランドセル
桜葉降る石垣に凭れけり
落椿重なり合へる昏さかな
税金を納めて来たる若葉寒
昼過ぎの土の匂へる春落葉
百千鳥空やはらかくなりにつけり

伊藤啓泉句集『舟唄』

（書肆犀・出版）

舟唄の声を囁らして合飲の花

啓泉

底紅集同人・伊藤啓泉氏がこの度句集を上梓されました。山形県の美しい自然に囲まれた暮らしの中で生まれた身辺俳句、夫人への深い愛。特に身近な最上川の風景句は絶品です。

元朝や雪に小言を吐く漢
村中の瀬音ゆかしき芹の水
アカシアの花の膨らむ最上川
端居して戦の話して帰る
妻がゐる竹の若葉の葉擦れ音
月山の風に真つ赤な木守柿
大手術終へ美しき冬銀河
悠久の母なる川のかいつぶり

（句集代・二二〇〇円）

「希望の方は伊藤啓泉氏に直接お申込みください。」

〒990-1122

山形県西村山郡大江町小見 二二五
☎ 023-762-2012

伊藤啓泉

庵閑話 36 虫丸



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>

俳誌のサロン



羽音集

増成栗人 選



キャンパスの延齡草に春の風
 春霞山羊のチーズと白ワイン
 ぼた餅に青海苔まぶす春の昼
 ポケットに競馬新聞春來たる
 駅弁の最後の一つ山笑ふ
 座しをれば五人囃子が空耳に
 陽炎の中へ列車の発ちゆけり
 川沿ひの小径をゆけば雲雀笛
 ひと息を入れるベンチに鳥の恋
 風の道見え菜の花の沖が見え
 春の寒さと乗り込む女性専用車
 啓蟄や夢の終りの雨の音
 春曉や夢の終りの雨の音
 葉脈を噛みてまことに桜餅
 チューリップ涙に最も遠き赤
 桃の日に瞳の大きな子誕生す
 雛の間に明かりを灯す頃の雨
 蓬の香朔日餅の列につく
 禅道場雪解の音のさらさらと
 余寒なほ母の羽織を父に掛く

札幌 北城美佐

船橋 藤原明美

松戸 吉清和代

大阪 遠藤 泉

俳誌のサロン